暮らしのぞき箱

季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

～第一〇五号～

穀雨　四月二〇日

幸田

今年は暖かい伊勢でも春の訪れが遅く、四月に入ってからのサクラの開花となりました。楠部町にある神宮神田の神田下種祭もいつもより遅い四月五日でした。しかし、周辺の田には用水路から水が入れられ、満々とたたえています。遅い季節の訪れを挽回するかのようです。

田んぼの名前を調べてみると、辞典の『広辞苑』には二百ほどの普通名詞があることを知りました。

昨秋に稲を刈り取った、そのままの田は「春田」、田植え前の乾田を「更田」、同じ田植え前でも準備が整った田は「代田」と区別した言葉があります。今のように水をたたえた様子は「水田」、田植えが済むと「植田」となります。そして、田植えをすませた後も、まだ実らないうちは「青田」、穂を出すと「穂田」となり、稲刈りがすむと「刈田」、冬は「冬田」、冬の田も雪の日には「白田」と季節とともに田んぼの名前もまた移っていきます。

また、季節だけではなく、嫁入り際に持参する「化粧田」、嫁や隠居が小遣いを得るために耕すという「ほまち田」など、今ではほとんど聞かれないものや、古代の律令制のもとに作られた「駅田」（諸道に設置した駅を維持するために支給）、「学田」（学生の食料や費用に当てられた）、飢きんの救助にあてた「救急田」などがあります。

二百近くの名前を見ていると、田んぼは日本人にとって近く、またいかに深く関わってきたかがわかります。なかでも一番魅かれたのが、神さまが守り、幸を与えるため作物がよく実るという「幸田」。恵みの多い田は、やはり神さまが守って下さるとした日本人の心のありようが表れていました。

文　千種清美

伊勢内宮前
おかげ横丁